「どうしたの？」
「何回も肩叩いたし最後はこれでもかってくらい思い切りひっぱたいたのになんで振り向かないのさ。」
「…え？何回も呼んだって？…ごめん、もう一度叩いてくれない？」
バシッ。…何も感じない。
まるで振りかざした手に重力がないみたいだ。私の体はこんなにも重いというのに。まるで…

金曜日 晴れ。
この流れからいくと今日は軽いはず……やっぱりな。どうしたと言うのだろう？でもまぁ何はともあれ体が軽いと気分まで軽くなるからいいか。そんな事をおもいつつ学校へ行った。今日は午後から友達と買い物に行く約束をしていたので授業が終わると私はすぐに席を立った。教室を出ようとし机に鞄があたった瞬間、左足に激痛が走った。何があったのかわからないまま私はその場に倒れこんだ。見ると親指は真っ赤に腫れ上がり、爪が半分割れていた。そして私の手元にはペンが一本、転がっていた。ひどい痛みのせいで結局買い物にも行けず、その日は家に帰ってずっと考えた。なぜペンが落ちただけでこんなにひどい怪我をするのだろう。まるで高い所から文鎮を落とされたみたいだ。まるで…

土曜日 曇り。
ベッドに体が張り付いて起き上がれない。今日は幸い学校も休みだ。このまま一日寝ていよう。でも一つだけ、一つだけ確かめなくちゃ。私は指一本動かすことすら困難になった重たい体を無理矢理ベッドから引きずり降ろした。そして１番近くにあった読み掛けの本を足に落とした。時計を落とした。
電気スタンドを落とした。どれも羽のように軽い。シャワーを浴びた。
霧を浴びてるようだった。これ以上動けなくなりベッドに入って深い眠りについた。

日曜日 雨。
羽のよーな体でふわふわ身仕度をすませ家を出た。傘をさして玄関を一歩出た瞬間…そこにはもう誰もいなかった。穴の開いた傘と薄い紙が落ちていた。よく見ると人型のに見えるその紙は、まるで版画のように雨によって地面に刷り込まれ、やがて消えた。まるで…

月曜日…いつものように一日が過ぎていく。夜咳が少し出たがただのカゼだと思う。

火曜日…今日は夕方から用事があって新宿まで出ていったが少し体がダルイように感じた。昨日からのカゼが悪化したのだと思ったが熱がないようだからそのまま明け方まで友人と新宿の飲み屋にいた。

水曜日…今朝7時ぐらいに家に辿り着いたが夕方6時からアルバイトがあるため昼過ぎまで寝ていた。しかし起きたとたん、今までに体験したことのないくらいの頭痛と吐き気に襲われた。何かおかしいと思ったが私は昨日の飲みすぎのせいだと思い薬を飲んでアルバイトに行った。しかしバイト仲間に顔色が悪いと気味悪がられた…。

木曜日…昨日バイトで疲れていて11時ぐらいに起きた。学校に行かなくてわいけない。しかしベッドから起き上がれない。必死に起き上がって熱をはかった。39度。今日は動けないから一日家で寝て明日病院へ行こうと思った。

金曜日…東京に住んでいる伯母と病院へ行った。先生は深刻そうな顔をしながら伯母に話をしていた。伯母が顔を真っ青にしながら私のもとへ戻ってきた。私は緊急で入院することになった。

土曜日…自分が死んでいく夢を見た。起きたときは病院のベッドの上だった。そうだ、入院してるんだ。そのままもぅ一度目を閉じた。大阪にいる両親が来た。私が寝ていると思ってるらしく話をしている。「あの子の寿命はあと一日。」両親は泣いている。私はその話を聞いたとき恐ろしさで起き上がることができず震えながら寝たふりをしていた。原因はなんなのだろうか…。もっと早く病院へ行っていれば良かった。私は布団の中で泣くことしかできなかった。薬のせいで眠くなって寝てしまった。

日曜日…最後の一日。私は弱った体でお世話になった人たちに手紙を書いた。やり残したことがたくさんある。両親が目を腫らして病室へやってきた。私は自分が死ぬとは知らないふりをして両親にいつもどおりにふるまった。もぅほとんど喋る気力もないが…何も起こらず平凡に一日が過ぎていった。あっという間だった。私は夜、床についた。目を閉じたら一生起きることはない。しかし体のダルさでもうどうでも良くなった。ゆっくり目を閉じた。そして、一生目を開くことは無かった…。

【１日目】ここ地球は、いつもと何も変わらない日々を皆過ごしています。そんなある日、地球から遥か遠くのある星で、大きな計画がついに実行されようとしていました。そこは、戦闘民族のいる小さな星で、その宇宙人は、我々地球人には想像を絶する程強くて、地球人にとって最も恐ろしい存在でした。これまで何回かその戦闘民族は地球に偵察にやって来ました。その度地球では、地球滅亡の危機だとニュースが世界中に放送され、一部の研究家たちは、毎日毎日研究を積み重ねました。それでも何の解決策も見つけられないままでした。そんな間にも、宇宙人は地球侵略を試みて、今日は戦闘民族についに集合がかかりました。青くて美しい地球は宇宙人にとって、あまりに魅力的で素晴らしいものでした。今日はついに地球侵略計画がスタートする日。宇宙人は地球に向けて飛び立つ準備を始めました。

【２日目】何も知らない地球人は、いつもと変わらない一日を過ごしていました。日が暮れた頃、いくつかの宇宙船が地球に降り立ちました。それを目撃した地球人はたちまち慌てて、全世界は恐怖に襲われ、みんな逃げ隠れに必死になりました。

【３日目】宇宙船はどんどんやってきました。それと同時に攻撃も始めました。ほんの何時間の間に地球の約半分の人口は宇宙人の手によってなくなってしまいました。

【４日目】宇宙人は壮絶な力とスピードで、地球人を殺していきました。地球人はありったけの武器や核兵器を使って攻撃しましたが、かなうはずもなく、死んでいく一方です。

【５日目】ついにほとんど全部の人が死んでしまいました。動物もいなくなり、植物も破壊され、地球全体が荒れ地と化してしまいました。

【６日目～】地球は宇宙人だけになり、宇宙人は広い地球を占領し、やがて絶滅してしまいました。 おしまい。

１日目

日本人に対する拉致問題で、北朝鮮はまったく歩み寄りを見せる様子はない。日本政府は北朝鮮から納得のいく情報や証拠が得られず、日朝実務者協議は決裂してしまう。世論の声も次第に大きくなり、小泉純一郎内閣総理大臣は、ついに拉致被害者の家族会が要求していた、北朝鮮に対しての経済制裁を発動することを発表する。

２日目

日本政府が北朝鮮に対して経済制裁を行なうことを、世界中のマスコミが報道する。しかし、北朝鮮では何の動きもなく、不気味な雰囲気が漂う。

３日目

北朝鮮の金正日総書記は、経済制裁の報復として、日本を攻撃すると発表する。日本の国内では大混乱が起きてしまう。

４日目

北朝鮮は、以前に日本でも話題となった『テポドン』を日本へ向けて発射する。ミサイルは日本の各主要都市に次々と着弾し、日本は莫大な被害を受けてしまう。さらに金正日総書記は、核兵器を使った世界戦争を宣言する。日本政府は、日本国憲法第９条により、武力を行使することができないため、ブッシュ大統領に在日米軍の出動を要請する。

５日目

北朝鮮は、宣言通りに日本の大都市に核兵器を次々と投下する。これに対して、在日米軍をはじめとするアメリカ軍は、北朝鮮の各都市に核兵器を投下する。また、他の地域でも治安が乱れ、イラクではアルカイダ等による武装勢力のテロ活動が激化し、核兵器を使った破壊活動が世界各地で行なわれてしまう。アメリカ軍は事態の鎮静化を行なうため、核兵器を使用することになってしまう。このことにより、世界中で核兵器を使った戦争が始まってしまう。

６日目

この人間どうしによる争いで大量の核兵器が使われてしまい、地球上の生態系が崩れてしまう。

７日目

崩れてしまった生態系を立て直そうとするが、さらに大きく崩れてしまう。また核兵器の放射能により、大部分の生物が死んでしまう。そして地球は、核という恐ろしい武器により、滅んでしまった。

１日目（月曜日）
「いってきま～す！」僕はいつものように眠い目をこすりながら、昨日の授業の教科書が入ったままのランドセルをしょって、体操着袋を片手に持ち家の階段を走って降りた。毎日繰り返される、何の変哲もない日常の光景。ただ今朝はすこしラッキーだ。いつもの母の怒鳴り声がない。「急がなくっちゃ」と僕は小さくつぶやいて少し急な坂道を一気にかけあがった。
――様子が変だ。僕がこの異様な雰囲気に疑問を抱いたのは、学校の校門が視界に入ってからだった。毎朝きまって騒がしいはずの校舎には誰もないのだ。もちろん学校が休みなわけでもない。そういえば今朝から、母や、毎朝家の前でおしゃべりしている隣のおばさん、登校班に間に合わなかった他の生徒達…、誰ひとりとしてあっていない。
怖いほどに静まり返った校舎に立ち尽くしていた僕は、とりあえず自分の教室に向かうことにした。
６年４組と書かれた教室の前に行き、ドアに手をかけたとたん「瀬戸くん！早くこっちに！」と声を殺しながらも、確かに叫んでいる声が聞こえた。自分の名前を呼ばれた僕は驚いて、声のする方へ振り返ると学級委員の山下美紀がいた。話しかける暇もなく、彼女は走って奥の廊下に消えていったので、僕も慌てて後をおいかけた。
「まってよ！山下！」僕は少しだけ大きな声をだして彼女を呼び止めた。すると彼女は急いで僕のところまで来ると、「お願い、静かにして！大人達に見つかってしまうわ」と今にも泣き出しそうな顔で僕に訴えた。「え？」僕は何を言っているのか理解できずに、思ったままに「大人達？ねぇ、皆はどうしたの？」と尋ねた。
山下は僕のほうを見ないまま「私の妹は今朝、お母さんに殺されたわ」とはき捨てるようにいった。僕が何も言えずに呆然としていると、「こっちにきて」と普段は使われていない視聴覚室の裏にある倉庫のドアを開けた。すると、倉庫の中には 10 人弱の生徒たちが静かにうずくまっていた。僕の目の前には腕に包丁が刺さったまま寝ている同じクラスの滝本の姿があった。僕は驚いて、急いで駆け寄ろうとすると、ゴロンッと何かにつまずいた。下を向いて目に入ったのは、お腹にナイフがささったまま白目をむいて倒れている友達の村越の姿だった。「っひ… !! 」
震える僕の姿を見て山下美紀は「大人達は子供を殺そうとしているのよ」と小さくつぶやいた。何が起きているのか理解できないまま、僕は貧血のような感覚に襲われ、その場で意識が薄れていった。

２日目（火曜日）

気がつくと僕は倉庫の中の端で横になっていた。一瞬訳がわからなくなったが、回りを見渡すと遠くに村越の姿があったので、昨日の悪夢は現実であったことが理解できた。そして、ざっと辺りをみわたすと、山下の姿を見つけた。僕はまだ頭が朦朧としていたが山下のところまで行った。「山下、いったい何があったのか話してくれないかな」僕がそう聞くと、彼女は疲れきった表情で「私にもわからないよ。ただ昨日私が学校にくると、ナイフを持った校長先生が村越くんを追いかけながら“この世に子供なんかいらないだよ！全員死ぬんだ!!”って叫んでいて…。それも校長先生だけじゃなくて近藤先生も中西先生も、とにかく全部の先生が朝登校してきた生徒を次々に刺し殺していったのよ！」
「まさか、そんな…」僕は信じられなかった。山下は震えながら「でもきっと、学校に来たのは全生徒の４分の１くらいよ。あとは皆家で親に…」そういって、また静かに泣き出してしまった。
僕は山下が昨日妹の話をしたのを思い出した。もし、この話しが本当なら、きっと妹が殺される瞬間をみて、行くあてもなく学校に逃げてきたのだろう。呆然と立ち尽くしている僕をみて山下が「…ここに隠れているのがばれたら、皆殺されるわ」と、ぼうっとしながら呟いた。僕は何も言うことができなかった。そして、この恐ろしい現実に驚いて、ただ怯えたまま一日が終わってしまった。

３日目（水曜日）
あまり眠れなかったが、夜が明けた。倉庫の中にある小さな窓からキラキラと光が射している。この悪夢がまるで嘘のようだ。綺麗だなぁ、と思いながら座り込んでボケッとしていると、突然校内放送が聞こえてきた。倉庫内に緊張が走る。『おはようございます！ご近所にお住まいの皆さん、今日は集まっていただいてありがとうございます。これから第二体育館で死体処理についての注意事項をいいますので直ちに集合してください』
この時僕は初めて悪夢は現実であったことを実感した。そして、僕は突然立ち上がって勢いよく視聴覚室に向かって走り出した。すぐとなり隣とはいえ、大人に見つかれば僕だけでなく、倉庫の友達は皆殺しだ。だから、本当に死ぬ気で走った。後ろで山下が止める声が聞こえたが、僕はどうしても確かめたいことがあった。
どうにか気づかれずに視聴覚室につくと、急いでテレビをつけた。音はできるだけ小さくした。僕は、この異常事態が報道されていないはずがないと考えたのだ。

テレビの中に移っていたのは、驚くほど綺麗な彗星だった。そしてそのすぐ側には僕たちが今いる地球が映っていた。距離が近すぎる…？小学生の少ない知識でも異様に思える距離だ。
他のチャンネルに回すと、討論をしている偉そうなおじさんと気の弱そうな科

学者のおじいさんが写っていた。画面の右下には【彗星の細菌が地球に!?ウィルス感染の恐れ!?】とテロップがでていた。テレビの中で白衣をきたおじいさんが必死そうに「人間の行動がおかしくなり始めているはずです！皆さん正気に戻ってください！彗星が発見されてから３日もたっているのです！ウィルスはあと４、５日もあれば世界中に広がってしまいます！感染すると体に黒い蕁麻疹のような、てんてんが出てきます、早くワクチンを作って投与しないと…!!」と訴え叫んでいる。僕は話の内容より、まだ正常な人間がいることに驚きと喜びを覚えたが、それはすぐに絶望へと変わった。偉そうなおじさんが笑顔で「何を言っているのですか？彗星が近づいてわれわれは目が覚めたのではありませんか。犯罪者や、贅沢とワガママばかりで感謝を知らない子供、ワイロや汚職にそまった汚い政治家たち…それらは生きている価値などないではないですか。みな死んでしまえば、地球はきれいになるのですよ。我々が地球最後の人類となれるのです。素敵なことではありませんか！」その瞬間テレビから物凄い勢いの拍手が鳴り響いた。僕は呆然とテレビをみて固まっていたが、テレビの中で白衣を着たおじいさんは異様な雰囲気に震え上がっていた。「そう思いませんか、博士？」笑顔で話しかけてくる偉そうなおじさんに、科学者らしき人は泣きそうになって反論しようとした。「違う、わたしは…！」しかし、最後まで言い終わる事はなかった。バンッっと銃声が響き、「反逆者は消していきましょう、皆さん！」というおじさんの声とともに、再び拍手が沸きおこった。黒い蕁麻疹のような跡がたくさんついた手からの拍手が。
僕はテレビを消して、教室の隅にかくれた。そうして座り込んだまま動けなくなった。

４日目（木曜日）
昨日のテレビの光景が忘れられないまま、僕はこの異常な生活の４日目の朝を迎えた。なぜこんなことに、そう思わずにはいられなかった。母さんは元気だろうか。父さんは、弟は感染していないだろうか。僕は不安で胸が押しつぶされそうだった。しかし、空腹と疲労が重なり、動くのもつらかった。その日一日僕はただただ、弱い自分に情けなくなって、泣きながら神さまに祈るしかなかった。あの話が本当なら、この間にも、ウイルスの感染は広がり続けているのだ、涙が尽きることはなかった。

５日目（金曜日）
昨日は何もする気が起きず、視聴覚室の水ばかりのんで倉庫に戻らず、ここでボウッとしていた。しかし、きっと山下が心配している。僕はそう思い、今日は再び倉庫へ向かうことにした。一人でいるのは怖い。
見つからないように、再び勢いよく走って倉庫へ飛び込むと、物凄い視線を感じた。皆、僕を大人だと、殺人者だと思ったのだ。「瀬戸君！」山下がやつれた

顔で近づいてきた。「心配したのよ！二日間も一体なにをしていたの!?てっきり皆みたいに…！」言い終わらないうちに、泣き出してしまった。僕の今まで見てきた山下とは別人だった。元気で明るく、しっかり者だった山下。なんとも言えない感情を抑えながら、僕はテレビで見た光景を倉庫にいる皆に伝えた。「つまり、彗星のウィルス感染だと思う。僕もよくわからないけど、きっと人間は日に日に数を増して、狂っていっているんだ…。」
「そんな！じゃあ私たちはもうどうすることもできないの!? どうしたらいいの？ただ殺されるのを待つだけなんていやよ!!」山下がそう言うと、続いて皆が「そうだ！」「そうだよ！ ウィルスって一体何なんだよ！」一気に皆に攻められた僕は、ついカッとなって「そんなの、そんなの僕だって知るもんか！」と大きな声をだしてしまった。はっとしたが、遅かった。遠くから「誰かいるのか !? 」と近づいてくる声が聞こえた。教室内にいた村越を除く７人はとっさに隠れた。ドアがガラッと開くと、侵入者は足元にあった村越の死体に目をむけ、立ち止まったようだった。「誰かいるのかな？佐藤先生だよ～。辛かったねー、出ておいで～！」という優しい声が聞こえてきた。担任の佐藤先生だ！僕は駆け寄ろうと思ったが、山下が必死そうに僕にしがみついて阻止した。しかし、瀕死状態の滝本と一緒に隠れていた相沢は「先生 !! 」と勢い欲よく駆け寄っていった。「２人でいたのかー？よく無事だったな～？」優しい声で話しかける。「助けて先生！皆殺されちゃったんだよ！」泣きじゃくる二人に、佐藤先生は笑顔で手を伸ばした。そして、
ーーーー　勢いよく殴り飛ばした。声にならない悲鳴を上げた二人に、佐藤先生は「死ね！しぶとい奴らだな！死にやがれ!!」と叫び狂って蹴り飛ばし続けた。しばらく蹴り続けた後、ポケットからナイフを出して、二人のコメカミに向かって、躊躇いもなく突き刺した。先生は「さ～て、他にもいるかな～？」といって、機嫌よさそうに教室を出て行った。僕たちは隠れたまま動けなくなって、次の日になっても、声もだせずにその場で固まっていた。

６日目（土曜日）
村越と滝本と相沢が死んだ。死体と共に過ごすことに耐えかねた僕は、ある決意をした。「僕は家にかえるよ！」驚いた生徒たちは、いっせいに僕を見つめた。「こんな所に居たって死ぬだけじゃないか！僕は母さんに、父さんに、弟に会いたい !! 」僕が、小さな声で、でも確かに強い意志を持って言い放った。山下が「無駄よ。昨日の光景を忘れたの？」と冷たくいう。「それでも母さんは違うかもしれないじゃないか！テレビにも感染していない大人は映っていた。僕は何もしないで死にたくないんだ！」山下は深刻な顔をしたが、でもすぐに優しい顔になって「…そうね。どうせ死ぬならママに会いたいね。」と言った。久しぶりに山下の優しい顔をみた気がした。

「よし、じゃあ皆！今日の夜 12 時を過ぎたら、それぞれ自由な行動をとろう！僕はもっと遅くなったら母さんに会いに行く。皆がどうするのかは分からないけど、無事だったらまた絶対に会おう！」皆うなずきあい、僕は夜の 12 時までの間仮眠をとることにした。

7 日目（日曜日）
夜中の 2 時が過ぎたあたりで僕は倉庫を抜け出した。12 時にすでに倉庫から逃げ出した奴もいた。出発するとき、山下は僕に「もし、なにかあったら学校の裏にある空き地で待ち合わせようね。」といった。僕も山下も生きて戻れるかは自信がなかったが、何か“約束”がほしかったのだと思う。「必ず、どんな結果でも行くよ。それじゃあ、また。」僕は慎重に倉庫をでた。山下は満面の笑みで僕に手をふった。これが、僕が最後に見た山下の姿だった。
僕は大人たちが 2 時くらいなら眠っていると思ったが、学校をでると、何人かの帰宅途中の大人を見かけた。しかし、僕の家は近かったので、隠れながら慎重に走り続けたところ家の前までは行くことができた。
僕はなかなか家に入る勇気が出なかった。倉庫を出てどれくらいの時間がたったのだろうか。真夜中だ。月や星がすごく綺麗で、玄関の前に座り込んでぼんやりと眺めた。「空は綺麗なのになぁ…。」僕はため息のようにつぶやいて、泣き出してしまった。
ーーーがちゃん。っという音が僕の背中から聞こえた。
体がこわばる。
玄関が開き、中から人が出てきたようだ。恐怖と不安と、微かな期待を抱き振り向いた。母さんだ！泣いている僕をみて母さんは「かずちゃん！」と僕の名前をよんで強く抱きしめた。緊張の糸が一気にきれて、僕は大きな声で何度も母さんと叫び、しがみついて泣いた。「お帰りなさい。さ、お腹すいたでしょう。ご飯にしましょう。」母さんの笑顔をみて、安心すると僕は家の中に入った。よかった。
家に入ると真夜中なのに夕飯の支度の最中だった。何故かはよく分からないままだったが、そんなことはどうでもよかった。お腹がすいていたし、安心しきった僕はむさぼるように用意されていたご飯を食べまくった。ーーふと、父と、まだ 3 歳になったばかりの弟の存在が気になった。「ねぇ母さん、父さんと幸一はどこ？」すぐに続けて母さんが「さぁ、できたわよ～！今日のメインディッシュよ♪母さんがんばっちゃった！珍しいお肉あったから、柔らかく煮込んでスープにしたの」と楽しそうに話し出す。「あ、ありがと。」母さんは料理がそんなにうまくない。それでも僕は無事に母さんと会えたのが嬉しかったし、一生懸命な母さんの姿が好きだったので、食べまくっていた。でも、これは異常だ。臭いがすごい。

何のお肉かという疑問が浮かんだが、話し続ける母さんの声を聞いていたかったので、僕はなんとなくキッチンに目を向けながら話をきいた。何か大きいお肉のようでまな板いっぱいにのっている。
僕は母の話に「へー」と頷きながら、他の料理を再び食べ始めた。キッチンが気になる。家でさばいたのかまな板の上の血の量がすごい。
鳥肉？
ーーーちがう、あれは手だ。
「そうそう聞いてよ、かずちゃん。パパったら会社の女の子と浮気していたの！も～、最低よね。それでね…」続いてく会話。
ーーー赤い、あかい、人の手。人間の手。
あぁ、父さんも幸一も、みんな皆真っ赤になってしまった。

「母さん」僕は席を立ち、母さんに手を伸ばして抱きついた。そして、伸ばした自分の腕が、ふと視界にはいった。
くろい、黒いブツブツがたくさん。抱きしめてくれている母さんの腕も黒い斑点がたくさんある。ちょうど一週間、感染は広まったのだ。
「母さん、僕、母さんが大好きだよ。」
僕をぎゅっと抱きしめながら、「私もよ。」笑顔でそういうと母さんは包丁を手にとった。
そして僕の頭はゴロン、と床に転がった。床を、真っ赤に染めながら。

生物が気力と欲を失う

月曜日

昨日まで会社のためと思って働いていた男達が、今朝目覚めるとすべてがどうでもよくなっていた。当たり前のように会社も休んだ。２０年勤めていて無断欠勤するのは初めてだったが、罪悪感は不思議となかった。昨日まで家族や出世のために四苦八苦していたのが嘘のようだ…。でもそれは自由を得たと言うよりはすべての日常が億劫でめんどうくさいことになっていた。妻も一人娘も同じ心境にあるらしい。朝食を作る気のない妻と学校に行く気のない娘はぼんやりテレビを見ている。私はそのことを注意する気にはならなかった。

火曜日

農家の嫁は疲れた。今朝のような気持ちになるのは嫁いで何十年も経つが初めてだ。昨日までは手間と時間をかけてあんなに大事に育ててきた作物に興味がいかないのだ。収穫も種蒔きもしない。ただ枯れてゆく野菜をぼんやり眺めていた。

水曜日

アフリカでは百獣の王のライオンは目の前をシマウマが通っても何とも思わない。子供と自分が生きていくために狩りに行こうと試みるがどうしても体が動かない。また１匹シマウマが自分の前を横切った…。

木曜日

食糧や水場を求めて世界中旅する渡り鳥たちも飛ぶことをやめてしまった。どこへでも自由に飛んでいけることを昨日までは誇らしく思っていた。鳥籠や動物園の柵の中で生きている仲間たちに優越感を感じ彼らの上を自由に飛んでいた。そんなことは今となっては昔のことだが…。

金曜日

魚たちは泳ぐのをやめた。ずっと泳いでないと死んでしまう魚はそこで死に絶えた。水面には魚たちの死骸で埋めつくされている。もうこの光景は日常のものとなっていた…。

土曜日　　植物たちはこの日常に嫌気がさしていた。植物たちは太陽からの光も恵みの雨も拒絶した。つまり人類、生物、地球のためと思ってやってきた光合成を拒絶したのだ。そのとき彼らは人間の欲のせいで伐採されて死んでいった仲間たちのこと思い出していた。長い間恩を仇で返すような仕打ちを受けてきた彼らはこれから起こることがうれしくてしょうがないようだった。

日曜日

この６日間ですべての生命のバランスが急激に崩れた。町中が崩壊して生活できる状態ではなくなっている。そして世界中は静まりかえっている。なぜなら気力と欲を失くした全生命は眠り始めたからだ。人は眠る…動物も眠る…植物も眠る…最後の夢をみる…昨日までのことを夢見るもの、生まれ変わった自分を夢見るもの…内容はみんなバラバラだが、みんな夢をみて眠る…眠る…眠る…眠る？

眠っているうちに息をすることも面倒になりそれもやめた。そして地球上のすべての生命は永遠の眠りに就いた。

一月一日、新年を迎えた日本は激動に揺れていた。中国からの恐ろしい発表が原因である。その内容とはこうだ。

「我々は貴国の首相の靖国参拝について議論を続けてきた。しかし、貴国はどうか。小泉首相と同じく日本国民はこの問題に関心が無いようである。というより何故問題になっているかもわからないのではないか。我々にはもうこれ以上貴国の勝手な振る舞いを許す余裕はない。三日以内に貴国の答えを出してもらいたい。我々には貴国に脅威を与えるに足る理由も、そして武器もある。」

日本政府はこれに対し、どう対応してくれるのか。テレビではもはや通常の番組進行はしていない。常に政府を追いかけているようだ。

一月二日、私はインターネットを使い、中国の対日感情について調べてみた。「あなたは今、日本に親しみを感じますか？」「あなたが日本に親しみを感じる、または親しみを感じない理由は何ですか？」――。こうした質問に「親しみを感じない」と答えた市民が 31.2 %、「親しみをまったく感じない」と答えた市民が 22.4 %。この 2 つの回答の合計が半数を上回っている。日本に「親しみを感じない」と答えた人のうち、その理由として「日本が中国侵略の歴史を今なお真摯に反省していないから」と答えた割合が 61.7%。これは中国社会科学院日本研究所が行った最新の中日世論調査データの一部だ。中国の市民が日本に「とても親しみを感じる」「親しみを感じる」と答えた割合は 5.9「親しみを感じない」と答えた割合は 43.3 中国市民が日本に親しみを感じていない結果になる。正直、ここまでの数字が出ているとは思わなかった。こんな状態になって初めて、中国について知ろうと思ったとはなんと皮肉なことか。おそらく日本国民全体がそう感じていることだろう。

一月三日、アメリカからのメッセージが届いた。
「私たちの友人であるあなた達の危機を見過ごすわけにはいかない。最大限の援助をするつもりだ。」
日本中がホッと胸をなでおろしただろう。テレビをつけると、しかし日本はこういう所でアメリカに頼りすぎないことが大切だと評論家が語っている。私も同感だ。鼻息の荒いアメリカ人気質が事態を悪化させないとも限らない。

一月四日、中国が新たに発表してきた。
「貴国に時間を与えたのは友国と相談をさせるためではない。貴国の考えをまとめ、そのうえで我々に謝罪をしてもらうためだったのだ。しかし、我々は甘すぎたようだ。貴国に最後の機会を与える。今日中に貴国の首相からの謝罪を聞かない限り、宣言したとおりに脅威を与える。貴国と多大な友好関係にあるアメリカも同罪である。繰り返すがこれは、最終警告である。」悪い予感が

的中したのだ。アメリカには首相以下、大臣数人が赴いたのに対し、中国に向かった大臣は一人だけである。これでは中国が怒り狂うのも当然だろう。そしてもう一つの悪い予感が当たった。我が国の首相はとうとう謝罪しなかったのである。

一月五日、私はオーストラリアに向かっている。もちろん旅行などではない。避難である。「残念ながら謝罪の言葉は聞くことはできなかった。我々は相当の覚悟をもって発言をしたつもりだったのだが。こうなれば行動に移すほかはない。日が変わるまでに日本国民は諸国に避難してほしい。我々が滅ぼしたいのは国民ではなく、国家である。」これが中国からの発表である。当然のように国民は空港に急いだ。日本にあるだけの航空機では足りなかったが周囲の国々からの応援もすぐに届いた。その中には中国からの航空機もあったことからも真実味がうかがえる。約 4000 万人がアメリカ大陸へ、同じく約 4000 万人がヨーロッパ諸国へ、約 2000 万人がオーストラリアへ、約 1500 万人がアフリカ大陸へと避難していった。日本に残っているのは約 500 万人だ。どのような人が残っているのだろう。どうせ口だけだろうとタカをくくっているのか、はたまた人生に絶望しているのか。まさかとは思うが、この騒動を知らない人もいるかもしれない。避難したくともできなかった人だけは想像したくないが。

一月六日、日が変わると同時に中国は作戦を実行し、成功させた。目の前のテレビには映画で見たような惨劇が映っている。信じられない高さの津波が日本を襲っているのだ。ここにいても多少の揺れを感じるほどである。日本にはどれだけの震度を数えていたのか。自衛隊が命がけで撮ったわずか数分の映像だったが十分恐怖に足る内容である。しかし津波が治まったころ自衛隊が再び届けてくれた映像は私、いや日本国民全員を凍りつかせた。北海道が … 消えた …? しかし冷静になって考えると、そうではない。北海道は消えたのではなく、沈んだのである。よく見ると、本州でさえ半分近く沈んでいる。四国はもちろん、九州もまるで最初から無かったかのように跡形もなく消え去っている。この映像の後に続いて中国政府の会見の様子が映し出された。

「日本国民の諸君、貴国がどうなったかはもうすでに知っているだろうか。我々の起こした津波によって、大地の半分以上が沈んだのだ。しかし、これで終わりではない。正午、貴国は完全に海へと帰るだろう」

私は平静を装ってたが（ここは公民館のような所で、私と同じように避難してきた人達で埋め尽くされていたので）震えが止まらなかった。それほど中国政府の会見は高圧的で、有無を言わさない雰囲気に溢れていた。しかしその時だ。私は、近くでテレビを見ていた男の子が母親に尋ねる声を聞いた。

「ねぇ、アレどうやったの？」

…そういえば。日本の変わり果てた姿に心を惑わされていたが、いかなる方法

であの大津波を巻き起こしたのか。中国政府はその事に触れずに会見を終わらせた。軍隊か…いや、それだと大陸が沈む理由が説明できない。そうなると核なのか…いや。結論が出ないまま、時計は午後三時を迎えようとしている。オーストラリアはこの季節日本より二時間早く、中国は日本より一時間遅い。つまり、オーストラリアは中国より時計が三時間早く進む。中国時間の正午まであと二分…

そして、日本は中国の予告通り完全に消えた。自衛隊から送られてきた映像を見る限りでは、だ。奇声をあげる人、むせぶ泣く人、そして私のように動けなくなった人 … 。私が正気に戻ったのは画面がアメリカ政府の会見に切り替わったときである。すると大統領の口から驚くべき言葉が飛び出した。

「親愛なる日本国民よ。あなたたちの今の気持ちは、とても言葉には表せないだろう。それは我々とて同じだ。最大限の援助をすると宣言した以上、このまま黙ってるわけにはいかない。送り込んだスパイによって、中国が使った作戦は分かっている。同じ方法で中国に脅威を示したいとあなたたちが望むなら、我々は協力を惜しまない。そういう考えが少しでもあるのなら、急いで我が国に来てほしい。もちろん航空機は諸国に手配する。多数の賛同者を、心より望む。」

私も含め誰もが固まった。そして誰かの「行くぞ！」と叫んだ声で皆の緊張の糸が切れた。今まで沈んでいた気持ちが爆発したとでも言おうか。誰となく手を取り合って、どこからも「行きましょう」「行こう」と言う言葉が聞こえてくる。そういう私も心拍数が上がり、自然と拳を握り締めている。この場にいた全員がアメリカ行きを決めた。

一月七日、私たちはロサンゼルスに着いた。ここでも津波が猛威を振るったのだろう。街中が水浸しである。私たちはまた公民館のような所へ連れて行かれた。オーストラリアの時と違い、長机がいくつも置いてある。これに座れというのか …? すると遠くの方でマイクを持った黒人の男が口を開く。流暢な日本語だ。

「みなさん、よく来てくれました。私は責任者の、ジョージ・ウェアです。申し訳ないのですがとりあえず近くの机に３、４人で腰掛けてもらえますか？」それを聞いて、仕方なく近くの長机に腰を掛ける。椅子も足りない状態なのだろうか。これだったら床に座ったほうがマシな気もするが。全員が座ったのを確認すると、ジョージ・ウェアが続ける。

「ありがとうございます。では、さっそく中国が使った作戦について説明したいます。簡単です。ただ、彼らはジャンプしただけなのです。」

… 昨日とは違った意味で固まってしまった。理解ができない。しかし、わざわざ冗談を言うためにここまで連れてくることはさすがにしないだろう。

「みなさんが理解出来ない気持ちは分かります。
しかし、これは本当なのです。イギリスで行われた実験を知っているでしょうか？」…! 聞いたことがあるような …
「それは、イギリスの子供 100 万人にジャンプさせて人工的に地震を起こす、といったものです。そして、それは成功しました。子供たちはほとんどバラバラにジャンプしていたのにも関わらず、です。」
　そういえば中国で 13 億人目の子供が産まれたと、先日ニュースでやっていた。想像もできない数だ。「それに中国が目をつけたのです。ジャンプできないほどの小さな子供や老人を除いても優に 10 億を超える数の国民がいる国です。イギリスの実験と違うところは参加者がケタ違いの数であり、そのほとんどが大人だということ。そして全員が一斉にジャンプすることです。この人数が何度も繰り返し机の上から飛び降りた結果、あのような悲劇が生まれたわけです。大地が激しく揺れ、その大地を飲み込むほどの大津波 … 今でも恐ろしい。」
やっとこの長机の意味が理解できた。この上から飛び降りろということか。「私たちは各国から参加者を募りました。その結果、日本とアメリカのほかにイギリス、ブラジルや、オーストラリアなどの国から多数の人々を呼ぶことができました。カナダの国民は自分の家で作戦を実行してくれます。もちろん、中国のように 10 億の人を集めることはできません。多くて 5 億といった所でしょう。しかし、これでも十分のダメージを与えることができると確信しています。私たちもハワイ島やグアム島を失いました。ここロサンゼルスでも死者が出ています。彼らの為にも私たちは戦わなくてはならないのです。」
　周囲から歓声が聞こえる。また、ヒートアップしてきたようだ。「作戦実行は約 30 分後です。それまでに食事をとって体を少しでも重くしておいてください。」
アメリカンジョークともとれる言葉で説明は終わり、食事が支給される。そういえばまともな食事は 2，3 日とっていない。それに心労も重なって、5 キロくらい痩せたような気もする。
　久しぶりの食事を終えて少しリラックスしていると再びジョージ・ウェアがマイクを持った。
　「みなさん、食事のほうは済みましたでしょうか？まだの方は急いで下さい。あと 5 分で作戦開始です。作戦といっても、簡単なことです。我々の合図で机から一斉にジャンプしてください。しばらくすると地震が起きますので、その机の下に身を隠してください。この建物は安全だといえるんですが、念の為です。そして 5 分後にまた私の合図でジャンプです。そして隠れます。これを 10 回繰り返します。… もうすぐですね。みなさん、机の上に立ってください。少し難しい場合は手をつなぐなど、隣の方と協力してみてください。それでも駄

目なら、床に立ってください。その場でジャンプしてもらいます。」
ほとんどの人が机に立つことができた。彼はそれを確認して満足そうに頷き、続けた。「みなさん、準備はいいですね。あと１分です。私がハイ、と言ったらジャンプしてください。」
また心拍数が上がってきた。
「あと 30 秒 … 」
余計な事は考えないようにしよう。
「あと 10 秒 … ５秒 … ハイ！」
全員が机から飛び降りる。一瞬、間が空いて大きな音が響く。
「もうそろそろ地震が起こるはずです。早く机の下へ！」
その言葉通り、揺れが始まった。思ったよりも大きな地震だ。震度でいったら３か４といった所か。しばらくして揺れが治まると指示を待たずにたくさんの人が机に上り始めた。第二撃が待ちきれないのだろう。… そうして私たちは、約１時間の間ジャンプを繰り返した。
　床で休んでいたらジョージ・ウェアが大きな声を上げてマイクを手に取った。「みなさん、喜んでください！成功です！今入ってきた情報によると中国にマグニテュード９レベルの地震と共に 10 メートル以上の大津波が押し寄せたようです！」歓声が上がる。涙を浮かべる人もいた。中国が島国でないことは残念だが、多大な被害を与えたことは確実だ。私は気が付くと再び拳を握り締めていた。
　「大変です、みなさん！」
それは突然のことだった。私も含め疲れて寝ている人がほとんどだったためか必要以上に大きな声を出したようだ。
「先ほどの攻撃は中国の死者は三万人を超えたようで他にも万里の長城が半壊するなど、色々な所で大きなダメージを与えたようです。それを受けて、中国政府は反撃の用意があると発表したのです。今度は国民を総動員すると付け加えて。」なんということだ。ただ、落ち着いて考えればやり返してくるくらいは予想できた範囲だっただろう。しかしそれだけ日本国民もアメリカの大統領も復讐することしか頭にはなかったということか。
「そこで我が大統領は先手を打つことに決めました、10 分後です。」さすがに誰もが目を覚ましたようで、少し周囲は騒然としていた。やるしかない、のか。
　「あと５秒です … ハイ！」
一斉に飛び降りる。そして机の下に隠れる。３時間前に何度も繰り返してきたことだ。しかし少し今回は様子が違う。揺れが大きく、またなかなか治まらないのだ。「みなさん、もうすぐジャンプしなくてはなりません。早く机の上に立ってください！」まだわずかに少し揺れているようだが構わずに彼が叫んでいる。仕方なく机の上に上がるが、揺れが終わっていないので立てない人もい

るようだ。「机の上が駄目なら床でも構いません。あと 1 分です！」焦っている。それもそうだろう。明らかに 3 時間前とは状況が変わっているのだから。
「あと 10 秒 … 5 秒 … ハイ！」
何とか机の上に立った人たちが一斉に飛び降り、しばらく隠れる。すると、だ。今まで体験したことのない地震が始まった。建物が崩れてきたため、机を手放さないようにする。悲鳴しか聞こえない。しかしその時なぜか、私は冷静になっていた。… そうか、きっと中国も同じタイミングで机から飛び降りたのだ。互いに強力なエネルギーをぶつけ合うと、どうなるか … 。惨劇の中で、世界がひび割れていくことを想像していた。

この世の中で一番求められている情報とは…。それは未来の情報ではないか。この情報を手に入れるために、日本は秘密裏に予言機械開発チームを発足させ、その研究を続けていた。

月曜日

ついに、予言機械が完成した。予言機械とは文字通り既知のデータを入力すれば、それに関する未来を正確に予知する機械である。　さっそく、地球の未来を占ってみた。『The world will be gone out of existence on next Sunday. ー次の日曜日に地球は滅びる…。ー』

火曜日

この予言を受け、国のトップたちが緊急に召集され会議が開かれた。議論の焦点はこの予言を世界に公表するか否かに集まった。「この予言を公表すれば、世界は混乱しどんな事態になるかわからない。」「しかし、どこまで隠し通せるか…。」また、各国とどのように連携をとっていくかでも意見が割れた。「早急に各国に連絡をとり、世界的な規模で対策を模索すべきだ。」「しかし、我が国が予言機械を極秘に開発していたことがばれれば、叩かれるのは必至。」
意見は平行線をたどり、明確な指針を見出せずに会議は進んだ。

水曜日

日付が変わり、皆の顔には焦りの色が如実に表れてきた。そして、残された時間も少なくなり、国としての対応の決定がいよいよ迫られてきたその時。ひとつの意見が挙げられた。「この機械の正確さは様々なデータによって証明されています。だから、地球が滅びる事は覆ることのない事実なのです。それならば、予言を公表し世界の人々をいたずらに混乱させることはせず、その時を迎えるべきです。そのためにも、予言機械と開発チームのメンバーは…。」
日本国としての対応が決定した。

木曜日

政府の決定に従い、暗殺チームが形成され、予言機械開発研究所に彼らが到着した。しかし、そこには予言機械のデータ、そして開発チームのメンバーはいなかった。開発チームは自らの命が政府によって絶たれようとしていることを予言機械によって事前に知っていたのだ。死ぬのは怖くない。しかし、科学者として自らの発明が評価されることなく、闇に葬られることほど口惜しいことはない。そして、開発チームはひとつの結論に至った。